

# 言語地理学的手法をもちいた漢語語彙史研究 ——新来事物を表す語を手がかりに

## 【論文要旨】

本論は、現代漢語方言における新来事物を表す語を対象として語形分布地図を作成し、言語地理学的手法を用いて分析することで、中国語の語彙がいかにかに成立・変化し、その過程は地理的分布においていかなる特徴を示すかを明らかにした。言語地理学は、複数地点の言語データにもとづいて、その地理的分布を地図化し、地理・歴史・文化などの言語外要素を結合させながら解釈することで、言語現象の通時的変化を再構成し、その原因を明らかにすることを特徴としている。従来の漢語語彙史研究においては、現代方言は直接的な考察対象ではなかった。しかし、言語地理学的手法は、文献的語彙史研究とは異なる資料を用いて言語の歴史を明らかにすることができ、従来の語彙史研究にはない角度から語彙生成・変化のメカニズムを解明することを可能にする。本論は言語地理学的手法を用いた漢語方言研究の漢語語彙史研究に対する有用性の一例を示すとともに、その成果を語彙史研究に還元しうることを示した。

本論が分析対象とする新来事物とは、中国固有ではない事物、特に近代以降に他の地域から中国にもたらされた外来の事物を指す。中国語における外来事物を表す語は、事物そのものが受容される過程で音訳語だけでなく意識によって新語を創造する傾向がある。以前には存在しなかった事物が新たに導入される際に既存の語彙体系の中で独自の語形を形成していく過程は、それによって固有の既存語形の成立方式を類推することが可能となり、中国語の語彙の特質を考察するうえで重要な意義が認められる。

本論は、序章・主要論考部分4章・最終章の全6章からなる。

序章「本論文の意義と方法」では、本論の背景として漢語語彙史研究の現状と、言語地理学的手法による漢語方言研究の研究史を整理した後、本論の目的・方法及び本論の構成を述べた。漢語語彙史研究については、常用語彙・基礎語彙を対象とした記述研究を中心として成果が蓄積されてきていること、また、文献調査の結果を現代方言とつきあわせる方法が有力な研究手法の一つとなっているが、現代方言研究の成果を十分に利用するという段階にはないことなど

を指摘した。漢語方言の地理的分布を網羅的に把握し、共時的研究の成果を通時的研究の領域へ変換する手段が乏しいことがその一因と言え、その空白をうめることが本論が言語地理学的手法を採用した目的の一つである。中国語における言語地理学研究については、理論面でも実践面でも発展途上にあり、さらなる例示・検証を要する。そのため、本論は中国語における言語地理学的研究のサンプルとしての意義をも有することなどを述べた。

本論に通底する問題意識は、次の3点に集約される。

- 1) 語彙はいかに形成されるのか、その成立方式を明らかにする。
- 2) 語彙が成立した後、いかに定着・消失・変化などの次の段階が決定されるのか、そのメカニズムを帰納する。
- 3) 上記の過程は、語形の地理的分布においていかなる特徴を示すのか、語形分布地図にもとづいて明らかにする。

このような問題意識のもと、主要論考部分では各章いずれも1つもしくは2つの新来事物を対象として、現代漢語方言における語形分布地図を作成し、言語地理学的手法と文献調査によって分析した。

第一章「方言分布から見る新語形の成立方式について——新来事物ジャガイモ・サツマイモを例として」では、新来事物を表す語がいかに既存語形と接触しながら独自の分布類型を獲得するか、その成立過程を明らかにした。考察の結果、新語の成立方式のパターンとして、既存語形に修飾成分を付加する「援用方式」と、既存語形をそのまま自らのものにする「転用方式」の2つを提示した。「援用方式」では対称項として既存語形を必要とし、新来事物と在来事物の呼称の分布が重なり合う。たとえば、江淮地方においてサツマイモは“山芋”という語形を用いるが、ジャガイモを表す“洋山芋”はサツマイモを表す“山芋”を語幹として修飾成分“洋”を付加した語形で、両者の分布地域は重複している。このような語構成と地理的分布は、同時期に伝来した新来事物であるにもかかわらず、サツマイモのほうがジャガイモよりも伝来・定着が早かったことを示唆している。一方、「転用方式」では同語衝突を回避するために相互の語形に操作が加えられ、同一地域で同じ語形が重複して用いられることはない。華北東部ではもともとナガイモを表す“山药”という語形がジャガイモ・サツマイモに転用される。付加成分のない“山药”は、河北省北部から山西省北部

にかけてジャガイモを、河北省南部ではサツマイモを、それ以外の地域ではナガイモを指し、三者は地理的に相補分布する。“山药”を含むジャガイモの語形は山西省南部・河北省南部にも分布するが、いずれも後置成分をともなった語形“山药蛋”または“山药豆”であり、それによって同語衝突が回避されている。このように、「援用方式」と「転用方式」はともに既存語形と密接に関連して成立するのが特徴といえる。

第二章「新語成立における修飾成分の消長について——セッケンを表す語を例として」では、援用方式の成立過程が一様ではなく、成立後もそれぞれに定着度・影響力の強さが異なる点に着目し、「外来」を表す主要な修飾成分“洋”を有する語形のふるまいを分析した。修飾成分には一般に描写性と限定性の2つの性質があるが、在来セッケンから外来セッケンへと指示対象が交替するセッケン語形の特徴を利用して、特に修飾成分の弁別機能の性質を明らかにした。“洋”は在来事物を表す既存語形に弁別成分として前置されることで外来事物を表す新語を構成し、その新語と既存語形は二項対立をなす。在来セッケンを表す語は主に“碱”・“肥皂”・“胰子”という3つの語形が地域差を形成していたが、外来セッケンの導入にともない、それぞれに修飾成分“洋”を付加した“洋碱”・“洋肥皂”・“洋胰子”という語形が創出され、在来セッケンと外来セッケンを区別した。ここでは“洋”は「外来」という語源意識が明確であり、弁別成分として機能している。在来事物が淘汰されて弁別機能を失うと、“洋”は脱落しやすくなる傾向があるが、語形式の構造によってその定着度は異なる。“洋碱”は語彙の二音節化傾向に合致したため形式をかえずに定着したが、その修飾成分“洋”は本来の「外来」という語源意識が希薄になった。“洋肥皂”は、単音節語が二音節語を修飾する修飾構造をもつが、漢語の韻律上許容されないことの多い語構造であるために早くに“洋”が脱落して“肥皂”となった。“洋胰子”も同様に定着しにくい語構造であり、在来セッケンが淘汰されると“洋”が脱落して“胰子”となった。しかし、同じく“洋”を有する語形“洋碱”が地理的に隣接して分布する地域では、類推作用がはたらいて“洋”が保持される場合があることが観察された。

さらに第二章では、援用方式と転用方式が任意に選択されるのではなく、援用方式から転用方式へ転換するという先後関係を有することを示した。また、

その転換の要件として、援用方式の参照項に採用される既存語形が在来事物と外来事物をあわせた総称として機能すること、新来事物と在来事物それぞれの語形式の区別が保持されることなどを挙げた。

第三章「事物の呼称における多様性の成因について——コーリャンを表す語を例として」では、援用方式における修飾成分の描写性が語彙の成立と変化に際して果たす機能を考察した。修飾成分の描写性を要件として語形式が変化するケースがあることを示し、具体的事物を表す語形式の多様性、言い換えれば語形発展過程における非連続性が形成される一因を明らかにした。コーリャンを表す語には、2つの相反する方向性をもつ変化が観察される。1つは、語形式が定着するとともに、その成立時に有していた具体性・個別性が失われ、語形式に対する語源意識が希薄になる変化である。たとえば、現代方言におけるコーリャン語形のうち、文献資料で確認できる最古の語形は“蜀黍”であるが、入声消失などの音韻変化を経た後、第一音節“蜀”と第二音節“黍”の音声形式が接近したことで重疊化し、“秫秫”と表記されるようになった。この変化は、語形式と指示対象との必然的関係性が失われたことを意味する。もう1つの変化は、語形式と指示対象との意味的つながりを強化し、言語記号の恣意性を低減しようとする有縁化であり、描写性の高い語素を付加することで、語形式の具体性・個別性を強化する。語源意識が希薄な形式である“秫秫”は主に淮河以北に分布するが、淮河以南では“秫秫”の第一音節が交替した“芦秫”という語形が分布している。“秫”は本来「アワ」を表すが、淮河以南の地域ではコーリャン・アワともに栽培量が少ないため、これらを区別する必要性が低く、そもそも事物そのものに対してなじみが薄い。そのため、弁別するうえでは不必要な“芦（アシのような形状をもつ）”という描写性の高い成分を付加することで意味的つながりを強化したのである。語形式と指示対象との対応関係に関わるこの2つの変化が相互に作用することが、語形式の多様性の成因の一つである。

第四章「漢語語彙の体系化過程について——トウモロコシを表す語を例として」では、コーリャンを表す語との比較を通して分析することで、第一章で提示した援用方式と転用方式を語彙体系の成立・変化という観点から再検討した。新来事物は類似する在来事物のいずれかに分類され、その在来事物を表す既存

語形を参照項とした語形式を与えられる。新語は既存語形との関係のうえで成立することで体系内部に組みこまれ、新たな語彙体系が創出される。新語と既存語形は二項対立をなし、類似する語形を与えると同時に、同語衝突を回避するために意識的に両者を区別する操作を加える。新来事物であるトウモロコシは当初ムギ（“麦”）やコメ（“米”・“穀”）の一種とみなされたが、栽培の普及・定着とともにコーリヤンの一種とみなされ、各地でその方言語形を参照項とした援用方式による語形が成立した。トウモロコシとコーリヤンを表す語形式が多くの地点で二項対立をなすことは、両者を同じカテゴリーに分類して構成要素を共有する形式を与える語彙体系が成立し、その体系そのものが伝播したことを意味する。いったん語彙体系が成立すると、たとえその構成員の形式が変化しても、他の構成員の語形式に操作を加えることで体系性を再調整する機構がはたらく。たとえば、トウモロコシを表す“玉芦”は、“芦”を修飾成分とするコーリヤン語形を参照項として、修飾成分“玉”を付加した援用方式によって成立した。トウモロコシがザクロ（“石榴”）に似ているという民間語源によって“玉芦”が“玉榴”に変化すると、コーリヤンを表す語でもそれにともない“榴”を構成要素とする“榴粟”・“榴稷”などの語形が形成された。これらはいずれも語彙体系を維持するために発生した現象であるといえる。

最終章は、本論文の成果をまとめるとともに、同じく新来事物であるトマトを表す語の語形分布地図の分析を通してそれを検証した。また、語彙の伝播方式と分布類型、語彙の成立と変化という観点から新来事物を表す語の特徴をフィードバックした。新来事物を表す語の分布類型の特徴としては、事物自体とその呼称が同時に伝播した過程が地理的分布にある程度反映されることなどを挙げた。本論がとりあげた事物は中国東南地方沿岸部に伝来したとされるものが多かったため、事物自体が南から北へ伝播するのにともない、それを表す語形式もまた南から北へと伝播する方向性を有することが観察された。新来事物を表す語の成立と変化に関しては、意味（指示対象）と語形式の対応関係を確立することがその要件となることを指摘した。本論が提示した「援用方式」・「転用方式」や同語衝突の回避などのメカニズムは、いずれも指示対象と語形式の対応関係の混乱により使用上の支障をきたす事態を避けることが必要条件となっている。また、指示対象と語形式の対応関係が確立しさえすれば臨時的な形

式であっても語となりうること、それが語形式の多様性の一因でもあることなどを指摘した。最後に、今後の課題として、本論が明らかにした語彙成立・変化のメカニズムを新来事物以外の語彙を対象として具体的に検証する必要性、漢語方言研究と文献言語学の統合の問題などについて言及した。方言研究と文献研究の統合については、文献資料と現代の共通語または漢語方言の語形式が一致しないことが多いこと、また、文献的語彙史研究と言語地理学的研究では有用性を発揮できる領域が異なり、問題意識が共有されないことなどが統合の障壁となっていることを指摘した。